

● 第 28 回学術講演会報告

ワークショップ③

「新型コロナによる社会的な分断をどう捉えるか？」

孤立対策と新しい社会に向けたコミュニティ形成についての意見交換」

○日 時：2020 年 11 月 29 日（日）15:00～17:00

○場 所：Zoom6

○パネリスト（五十音順）：勝部 麗子（豊中市社会福祉協議会 コミュニティソーシャルワーカー）

首藤 義敬（株式会社 Happy 代表）

筋原 章博（大阪市港区長）

中野みゆき（NPO 法人 Oneself 代表）

西垣 千春（神戸学院大学教授、学生の未来センター 所長）

○コーディネーター：弘本由香里（大阪ガス エネルギー・文化研究所 特任研究員）

○取りまとめ：三浦 研（京都大学教授）

弘本 これから都市住宅学会大会ワークショップ「新型コロナによる社会的な分断をどう捉えるか？ 孤立対策と新しい社会に向けたコミュニティ形成についての意見交換」を始めさせていただきます。新型コロナウイルスのパンデミックが、人の暮らしの尊厳、コミュニティに不可欠な交流を困難にして、深刻な孤立や社会的分断を加速させています。新しい生活様式や日常において、コミュニケーションをどう支えてコミュニティをどのように生み出して育ていけばよいのか、私たちにできること、すべきことはなにか、議論の場を設けたいとこのワークショップを企画しました。



弘本 由香里

最初に、豊中市社会福祉協議会でコミュニティエンパワメントを実践されている、勝部麗子さん、次に神戸市長田区で多世代型介護付きシェアハウス「はっぴーの家ろっけん」を運営されている首藤義敬さん、その後、神戸学院大学で「学生の未来センター」を開設し学生の引きこもり防止や就業支援に取り組まれている、西垣千春さん。続いて、神戸市で国際交流シェアハウス「やどかり」を拠点に、留学生や技能実習生の生活・就業支援などをされている、NPO 法人 Oneself の中野みゆきさん。最後に大阪市港区長として公民連携による地域再生に力を注がれている、筋原章博区長に加わっていただき、それぞれの現場の現状と実践を通して、課題の共有と解決

に向けて議論したいと思います。

勝部 我々は阪神淡路大震災をきっかけに小学校区の単位で、見守り組織を作ってきました。地域の中で見守りをやりだすと、いろんな課題が発見されて、どうすればうまくいくのか、当時、5年くらいかけて組織作りをしました。



勝部 麗子

けれど、見守っても解決する人が縦割りで、制度の狭間があると、結局、できるだけ見ないようにするとか、見て見ぬ振りが始まる。全国の社会福祉協議会が見守り組織を作っていますが、なかなか発見や解決できないのは、トータルで支えていく、断らない相談のできるソーシャルワーカーの存在がないから。2004 年から私たちは、コミュニティソーシャルワーカーという名前で、断らない相談を始めました。断らないなかで、この十数年で 50 くらいプロジェクトができました。ゴミ屋敷、引きこもり、8050 問題など、様々な問題を受け止めて解決してきました。

このコロナ禍では、コロナの影響で減収された方々への貸付の窓口を社会福祉協議会が担っています。全国の社協、特に都市部の社協は、この半年間にリーマン・ショック後の 3 年間の貸付件数の 14 倍。毎日 100 件くらいの方々のご相談を受け続けています。

今回は、在留資格のある外国人は特別給付金の対象になりましたが、技能実習生の人たちには貸付もなく、自国にも帰れない。ベトナムの方々も最近家畜を盗んだ報道もありましたが、こうした問題が今、我々のところでも大きくのしかかっています。

家を失った人たちもたくさん出てきています。ある日、地域の民生委員さんが、朝、公園でラジオ体操をしているところに行くと、3密を避けて公園にたくさんのホームレスの人がいることが分かりました。そこで、私たちは5月頃から早朝、公園の訪問を始めました。最初に出会った方は、2月までは普通に暮らしていた方で、ご事情があって家を出てから、サウナやネットカフェで寝ていたら、そこが全部、緊急事態宣言で閉められて、行き場がなくなった。3カ月近く誰ともしゃべっていない中で我々と話をしました。この間、家を失った人を20人ほど助けています。

特別給付金は役立ちましたが、4月に貸付に来られた方は、もう7カ月にわたり支援を続け、これ以上貸りられません。12月には支援が途切れます。貸付は結局、ご本人が自分で借りる自助ですから、140万ものお金を借りた方々がどうやってこれから返していくのか。不安でいっぱいです。

ある時、地域の民生委員さんから「我々、25年間、阪神淡路大震災から一生懸命、見守り活動をしてきたけど、コロナで死なないために地域活動を全部止めていいの。そんな活動だったのですか」と言われました。私も本当にそうだと思います。コロナで死ななくても孤独死が増えます。そこで、5月20日、緊急事態宣言が明けてからは地域の活動を再開させていきました。

これまでの地域づくりは、集まって、みんなで話し合う、一緒に会食しながらわいわいがやがやが手法でしたが、ソーシャル・ディスタンスで、これまでのやり方ができない。そこで、集まらなくても、離れていても繋がれる手法を考え始めました。

最初にやったのは往復はがきです。往復はがきのよさは、電話だと聞いた人との1対1の対応ですが、はがきの返信があると、みんなでそれを共有することができる。それを使って、今度はお便りにいろんな人たちの意見を書いて送ることも行っています。現在はなぞなぞ、脳トレ、ドリルなどを送って、返信してもらう往復もさせていただいています。

緊急事態宣言下でお困りごとのアンケートも取りまし

た。外国人の人たちがマスクが手に入らないとか、高齢の方は、施設で入所されている方と会えなくなって、家族にどんどん認知症が進むなどのお困りごとも書いておられました。

私たちの職場の会議室では、食べられない人たちを支えるフードバンクをスタートさせました。その中で気がついたのが大学生の存在です。一人暮らしの大学生がZoomで教育を受けている。まったく友だちとの交流がない。しかも、バイトもできない。困窮がわかって、彼らに食材を送るプロジェクトを行いました。実は、今、この大学生の人たちが学習支援のボランティアとして活躍してくれています。

市内の郵便局にマスクポストを作っていただいて、学校や施設などに配らせていただきました。手作りマスクも5000枚くらい作りました。

こういう取り組みの中で、食べられない人たちがたくさんいることがわかってきたので、年金生活など、コロナの影響を受けていない人たちに応援してもらおうと、食材支援のキャンペーンとして、寄付付き商品を買っていただく取り組みも行いました。これは福祉作業所、障害者の作業所などで商品が売れないところの応援も兼ねて行いました。

また、引きこもりの若者が家の中で一生懸命育てていた赤メダカが、コロナ禍の癒やしになると考え、メダカを分けていただいて、育て方を習いながら、繁殖させて、いろんな方に配っています。彼は指導に来てくれて、今、外に出てこられる人になりました。

新しい生活様式下での地域活動再開に向けたガイドラインも、専門家委員会のご意見もいただきながら作っています。

豊中社協 YouTube チャンネル・豊中社協 TV も開局し、動画を30本作りました。登場していただいたのは引きこもりの若者など。コロナの中でどんな活動をしているのかお互いに知り合うために、こういうチャンネルを作って、動画配信によって情報交換できるようにしました。

会食会はテイクアウト方式で実施しています。子育てサロンはお母さんたちが家から出られず、子どもとずっと向き合っている中で虐待が起きる可能性も高いので、再開させました。

介護予防の体操は人数を半分にしたたり会場を大きく広げ10月からは実施しましたが、11月下旬になってまた

少しコロナの感染者が増えて、実施を見合わせているところ。これは遠隔サロンの動画配信。こういう撮影をしたり、七夕の時期にはうちわを持って、筐に「早く会いたいね」なんて書いて、短時間の友愛訪問をさせていただきました。

豊中には農家がありません。定年後の男性が宅地で農業ができるように、7箇所土地を無償で借りて、農業をしています。これも今、おもしろい取り組みで、都市農業を支える、1つのモデルとしてやらせていただいています。男性は孤立しやすい。孤立しやすい男性をどうやって繋げるか。イギリスでは「男性の家」があって、そこでいろんなものを作って社会に貢献するそうですが、私たちも作った野菜を子ども食堂や地域に提供しています。屋外での活動ですから、フェイスシールドをしながら、移動販売も行っています。

子ども食堂はなかなか再開できずにいました。2カ月、3カ月と時間が空き、子どもたちのモニタリングができず、しんどい子が増えていることがわかり、子ども食堂を屋外や、野菜収穫体験、配食という形で行うようにしました。

外出自粛で、見守りが減り、虐待の発見が減りました。高齢者が弱り、孤独死が起こります。自殺者も増えます。ボランティア自身が弱っていきます。中にはコロナ警察のような人が現れ、住民が分断される。家族が病人だと活動を否定する人たちも出て、住民の中でもボランティアしにくい人たちも出てきます。住民同士が疑心暗鬼になっていきます。

外に出ていけない中で、ローカルが大事だと考えるようになり、知恵と工夫が試されました。いろんなやり方で、繋がるためにどうしたらいいか、みんなが考え始めました。「1人もとりこぼさない」を実現するため、いろんな工夫をしてきました。それから、食べることの重要性も改めて考えました。食物の自給力の欠如の課題やフードバンクの意義も感じました。

出会って集まって助けられない制約の中で、新しい助け合いや社会参加の形を模索して、様々な取り組みを行っています。まだ先が見えませんが、コロナの中で孤独死を起こさせない。生活を支え自殺者を作らない。そんなことを今、必死に現場でやっています。

弘本 分断が進み、孤立が進む状況で、できることを知恵を集めて追求されている。その状況がリアルに伝わり

ました。孤独に対してできること、資源を持ち寄っていくこと、本当に参考になりました。

続いて、首藤さん。首藤さんは多世代型の介護付きシェアハウスの運営や、おせっかい不動産という最後までお世話する新しいタイプの不動産事業サービス、空き家再生事業など、これまでの当たり前を変える取り組みをされています。

首藤 神戸市の長田区から参りました首藤と申します。僕が小学校3年生のときに阪神淡路大震災が起きました。落ち込んでいた僕たちに、大人は、「新しくまちが再開されるから、昔以上のまち並みが戻ってくる」といつてくれた。でも、結果どうだったかというところ、まちに建物が建っていくにつれて逆に寂しくなった。「ゴーストタウン化してる。建物はきれいになっているのに。仮設住宅の方が人の繋がりがあってよかったな」と思った。ハードウェアも大事ですが、ソフト面を構築しないと人の暮らしは難しいと子どもながらに感じました。



首藤 義敬

そんな経緯で、株式会社 Happy という会社を営んでいます。どういう会社かというところ、若い方から高齢者の方までの暮らしの場を提供する不動産屋さんです。家を紹介するだけではなくて、人の暮らしには家以外にも大事なものがあつた。暮らしの中にある食、仕事、コミュニティまでも紹介できる不動産屋でありたい。なので、シングルマザーの方には子どもの習い事、ママ友、仕事、いろんなものを提供しながら、家も一緒に紹介するというスタイルです。

「はっぴーの家ろっけん」という5年前に始めたシェアハウスは、週に200人以上の一般の方が遊びに来る、にぎやかなシェアハウスです。住んでおられる方々は8割、9割が認知症で、30人くらいのおじいちゃん、おばあちゃん。元気でお仕事に行く方もいますし、医療が必要で、明日亡くなくてもおかしくない方のお看取りまでやっています。そんなところにいろんな人が遊びに来る、かなり特殊なシェアハウスです。日本人だけじゃなくて外国人も含め、多様な方が集まっています。

僕らは社会のためというより、僕ら家族と同じようにダブルケアで悩んでいる世代のために事業を作っています。僕自身、中学校2年生から学校に行っていない、間

題のある若者でした。今でいう多動症。当時はよく怒られました。奥さんは絵描きで一点集中型。ある意味凸凹な夫婦です。子どもも僕と似た特性で、「学校に行ったときに困るやろうな」と悩んだ。どういう暮らしをさせてあげたらいいのか。同時にその頃、僕のおじいちゃん、おばあちゃんが認知症になった。こういうダブルケアの世帯は何かを諦める。子育てか、介護か、自分たちの仕事をセーブする。僕たちが取った手段は、全部諦めない。好きな仕事、やりたい子育て、やりたい介護、全部貫き通すためにはと考えると日本にはモデルがなかった。「じゃあ、作ろう」とこのシェアハウスを作りました。なので、僕たちのエゴを社会化したのです。

この写真、真ん中に赤ちゃんがいます。この赤ちゃんのお母さんはこの現場にいません。「2時間、赤ちゃんを見とってほしい」と。これ、東京でやると大炎上ですが、「はっぴーの家」では超ウェルカムです。後ろのおじいちゃん、事情があって家族と会えないので、ここの子どもたちを受け入れています。真ん中の子どもはうちの娘の小学校2年生のときですが、おむつやミルクなどの保育スキルがついて同時に4人まで見られる。

そのときうちの娘が「赤ちゃんとおじいちゃん・おばあちゃんってすごい似てる」と言い出した。このおばあちゃん、言葉がしゃべれない。僕たちは食事介助をするのですが、結構難しい。言葉がしゃべれないので、表情や普段の行動を読み取らないとできないのですが、子どもはすらすらやる。僕たちが作りたかったのは日常の中からリアルな学びがあふれる、そんな暮らし。介護施設よりも、多世代の学びの場を作りたかったというのが本心。学校行かないだろうなと思ったうちの娘、今は予想を裏切り、日々、いろんな人に囲まれながら暮らしています。

僕たちは「日常の登場人物を増やす」といっています。この写真のおばあちゃん、彼女のためにハッピーな暮らしを追求しようとしても、今の日本ではなかなか難しい。お金の面も、介護の面でも医療の面でもベストな形というのはない。一旦諦めて、おばあちゃんのことだけを考えるんじゃなくて、コミュニティ全体にハッピーなものを追求しよう。そこに关わる人、人生の登場人物を増やすことを大事にして運営しています。

子育てのために、子どもに年に200人の大人と会わせる目的から始まったものが、今、週に200人になった。僕たちにとっても学びがあるし、それはおじいちゃん、

おばあちゃんにとっても一緒です。女の人はコミュニケーション能力が高く、社会に出ていきますが、男性、特に企業戦士だった方は、引退後、一気にコミュニティがなくなり、認知症になったりする。男性も人と関わるのはいいこと。勝手に「多世代型の介護付きシェアハウス」と呼んで、今、運営をしております。

企業理念は「ハッピーな暮らしを問いつづける」。1人ひとりにヒアリングして、「どう暮らしたいか」を徹底的に聞いて、それに必要なコミュニティや暮らしを提供するようにしています。

例えば、そもそも「家族とは」を「はっぴーの家」を作るときに聞きました。「大家族っていいよね」といわれます。確かに、大家族って素晴らしい。子育ても介護もしやすいし、暮らしやすい。でもこの50年間、日本がやってきたことは逆です。核家族化向けにまちを作る。そういうビジネスモデルで国が動いてきた。なのに、僕たちの世代に「大家族っていいよね」といわれても困る。街がそうじゃないから。だから、我々は、大家族神話のイノベーションを目指して、出した概念が「遠くの親戚より近くの他人」です。

「はっぴーの家」のワンシーン。実は家族に見えて、誰一人、血が繋がっていない。訳ありなおじいちゃん、おばあちゃん、地域の外国人、いろいろあった若者、子ども。これは家族の否定ではなくて、近くの他人のコミュニティを見直すことで暮らしやすくなる、こういう生き方があってもいいという提示です。

「はっぴーの家はすごいいろんな人がいる」と思われがちですが、目の前はシャッター商店街。将来人口推計を見てください。神戸市では長田区が最下位です。行政がお金を使ってきたが、結果が出なかったまち。けれど、コミュニティがあると逆転現象が起きる。今、この「はっぴーの家」の周りに移住ラッシュ、ベビーラッシュが起きている。最近多いのは4世代移住。地域に空き家が多いまちですが、今は空き家を活用したいけれども、なかなか見つからない。

僕ら、「1人のプロより100人の素人」と考えて、「はっぴーの家」が建つ1年半くらい前から街の至るところでワークショップを開催しました。「6階建ての建物を僕たちが建てますので、皆さん、どんな機能があったらうれしいですか。教えてください」。毎回10人くらい、歩いている子ども、主婦を巻き込みながら、「ほんまにどんなんがあったらいいの？」とヒアリングしまくりまし

た。計、多分、150人くらいから意見を聞いています。それを集計して、事業計画の基にしました。何がよかったかという、作る前から皆さんと一緒に事業を共にやっている感覚が作れた。オープニングイベントに、全国から400人集まるという驚異的な現象が起きました。僕ら、「競争するんじゃなくて共創しようよ」を大事にしながら運営しています。

入居者さんの紹介をします。このおばあちゃんは「はっぴーの家」の第1号入居者ですが、レビー小体型という認知症で幻覚が見える。目の前に1人、2人、3人と、人が立って見えるから怖い。こういう方に対して、一般的には刺激のない空間にいてもらう。けれど僕は、素人だったので「そんな刺激のない空間に押し込めて、このおばあちゃん、幸せになるのかな」と疑問に思い、「2人、3人、幻覚が見えるんやったら、20人、30人見せたい」と考え、やってみました。すると、おばあちゃん、「前から人が来るんだよね」といっても、「あ、そうだよね」で終わるようになった。いつも精神薬を飲まされて寝ていたのに、薬なしでぐっすり寝られるようになった。

おばあちゃんが泣いていたので、「なんで泣いているの？ちょっと刺激が強すぎましたか」と聞くと、「私、この歳になって、若い人たちがお酒飲みながら夢を語っている空間にいれると思わなかった」と。今の地域や福祉は、お年寄りをおじいちゃん、おばあちゃん扱いしすぎているんじゃないか。僕たちがいいなと思うものを一緒に楽しむキャパシティは持っている。そう考えて運営しています。

また、この方はお金がなくて、いろいろ問題のある、地域のクレーマーで、「この方の暮らす場所を探してほしい」と相談を受けた。でも、今の国の仕組みでは無理。で、僕たちは、本人のことだけを考えるのを諦めた。子どもが嫌い、地域にクレームばかりして嫌われている。そのうえ、お金もなく、認知症がある。このおばあちゃんに入居してもらって、おばあちゃんのことを諦めて、関わる人を増やしました。おばあちゃんを含め、全員にとってハッピーな環境を追求した。それが僕らがいつている、「ハッピーの総量を増やす」という考え方です。結果、おばあちゃんを1人狙いするよりも、おばあちゃんにとっての幸福の量が上がり、表情が変わってきた。子ども嫌いなおばあちゃんが赤ちゃんの対応してくれたり、最近では、戦争の話を子どもに伝えることがこのおばあちゃんの日課になっています。

複雑な環境でDVを受けて逃げてくる子ども、シングルマザー、本当にたくさんの方がこのまちにはいるけれど、僕たちがやっているのは、いろんな世代、多様な人、認知症の人も含めて、集まってきた人の関係性をほどよくデザインすること。そのために医療や介護の仕事も少し混ぜながらやっています。

もう一例、このおじいちゃん、うちに来たときに要介護5だったのに最近、回復しています。入居するとき、「どういうリハビリさせてもらったらいいいですか」って聞いたら、「何で、俺、今までがんばってきたのにリハビリせなあかんねん」っていわれた。「好きなことだけさせて、殺してくれて」と。「強いていいたら、何がしたいですか」と聞くと、「お酒が飲みたい」。なので、僕たちがやったのは、お酒を飲む環境の用意です。1人で飲んでもおもしろくないので、いろんな地域のコミュニティの中におじいちゃんを入れて、飲み会を開催しました。結果、ドクターが「はっぴーさん、どういうリハビリをしたか」とびっくりするほど回復しました。やはり人との関わりの中からできたことだと思います。

おじいちゃん、おばあちゃんは人生を達観しているので、リハビリをして筋力を上げることも大事だけど、むしろ子どもたちの成長していくプロセスを感じたい、というニーズがある。なので、リビングの中で子どもたちの習いごとをたくさん開催しました。例えば、体操教室。モンキーショーみたいで、人気のコンテンツになっています。

とはいえ、コロナが来ました。僕たちは「トラブルはお題だ」と考えています。国が言っているのは「3密、ソーシャル・ディスタンス」。それ以外言われてない。ただし、それまでの「はっぴーの家」は完全に3密な環境でした。そこで僕たちは初めに「はっぴーの家」と厚労省のポスターを組み合わせて、「はっぴーの家=3密な場所ですよ」というポスターをネットに公開した。「3密、ソーシャル・ディスタンスを避けましょうね」としか言われていないので、そのお題を守りながら何をするのが、今、大事だと思っています。

例えば、今、Zoom疲れの人が多。じゃあ、Zoom疲れをおじいちゃん、おばあちゃんにさせようと、どんどん、これ、やりました。皆さんのお子さんは普通にiPhoneを使ってYouTubeを見る。iPhoneを知らなくても普通に使える。その指南をすることにしました。これは新しく始めたオンライン診療です。この時期だから

こそオンライン診療がやりやすくなったので、導入しました。これは、うちのおばあちゃんと遠くは軽井沢のドクターが繋がって、オンライン診療をしている写真です。

次に取り組んだのは意識低い系のオンラインサロンです。なぜかという、緊急事態宣言が出た際、うちの娘、小学校4年生になったばかりでしたが、神戸市から送られてきたのは、「新4年生の勉強を家で自力でしてください」という教材。これ、かなり困っている家がたくさんあると考え、僕たちはZoomを使って全国の小学生の勉強を教える会をやり、そのメンターをおじいちゃん、おばあちゃんにしてもらった。ただし、いきなりおばあちゃんと交流させようと思っても無理。いつもいる関係性を作りたかった。そのために、意識低い系のオンラインサロンをZoomでやってみた。これは、遠くは沖縄や海外からも参加してくれるコンテンツになりました。入居者さんは認知症、いろんな特性がありますが、Zoomを使いこなしています。

要是多世代、マイノリティの方々を楽しめる学びのラボを作りたかった。オンラインを嫌がる方は多いし、「早くリアルに戻ってほしい」という方はたくさんいますが、選択肢としては残すべきです。僕の友だちで車椅子の方は「Zoomがあるから、飲み会に参加できる」といいます。今、日本中の高齢者施設には、この1年間、家族とも会っていない方がたくさんいます。その中でできることとして、オンラインの活用は大事で、新しい選択肢の1つとして、今後リアルに戻ってきても残すべきだと思っています。

「はっぴーの家」では、不登校の子たちが参加してくれています。世代がばらばらで、いろんな人がいる環境だから、普段、学校に居場所のない人たちが入ってきてくれる。最近、多世代で死生観について学ぶZoomの講座を始めました。毎週やっています。今、合計200人くらいの方と一緒に学び、その収益を不登校の子たちに還元する、というコロナの中の遊びみたいなことをやっています。未来を作るのは難しい。だから今、この瞬間、どうやって日常を作るのが大事だと思っています。

弘本 揺るがないコンセプトで、常に問いながら取り組まれている。また、リアルとバーチャルの役割、活かし方、学びの場に新しい課題を引き寄せて、解決の仕組みを作っていかれること、今日のテーマの大きなヒントになるお話でした。

それでは、ここから神戸学院大学で「学生の未来センター」を立ち上げて、支援に当たられている西垣さんに話題提供していただきます。

西垣 私たちの大学では、10学部には1万2000人弱の学生が学んでいます。実は退学していく学生は少なくありません。2014年の文部科学省の資料では、年間8万人、率にすると2.65%。特に私立大学で多く、4年間で1割以上がやめていく。しかも、1年生、2年生という割と早い段階でやめていく人が多いのです。



西垣 千春

退学した学生は一体その後、どうしているのか。3分の1ほどは再チャレンジして、新たな道を自分で切り開くのですが、3分の2ほどの学生は、学費が払えなかったりで、やむなく就職する。中には、社会適応が困難で、アルバイト生活を続けて、非正規就労を転々とし将来を見通せない状況に陥る学生もいる。今、全学生の半数以上が奨学金を借りて大学に来ています。これは私たちの大学だけでなく、大学共通のことですが、報道によると年間3万人の若者の自己破産が起きています。こうした状況ですから、ほとんどの学生は離学や退学に対して積極的意向はない中でやめています。大学にはいろんな研究者、専門家が集まっているので、そこへのサポートが可能だと考えました。

まず、退学について調査してみました。その結果、やはり男性の退学率が女性よりも高い。早期の把握のためには、例えば、履修登録の不完全な学生に対してアプローチを行う。あるいは、連続3回欠席、つまり理由も告げず3回休んだらやはり危ない。GPAは学習評価の指標で、平均2.4、2.5といわれています。それが1.5以下だとリスクが高まります。また、入学前から相談できる人への顔合わせが有効ともいわれています。更に、大学でただ授業に出て単位を取るだけでなく、教職員が学生にサポート的な対応のできる雰囲気作りの大切さが指摘されています。学業問題にはもちろん経済的問題も関連します。経済的問題から学業でつまずいたり、友達関係がうまくいかず、不適応になり出席ができなくなる。あるいは学習がうまくいかなくなる。それらが重なって退学に結びつく、という流れが見えてきました。

そこで、私たちの大学では「学生の未来センター」を昨年の4月に設置しました。このセンターの目的は、退

学しようとする学生をできるだけ学べる環境に繋いだり、やめていくとしても、よりよい就職に繋げていくサポートです。学ぶ機会を切ってしまうのではなくて、退学の原因を緩和して、できるだけ卒業に導いていく。これはかなり丁寧に相談対応しないとできないのですが、それに向けて動いています。それから、ご存じのように新卒一括採用が今の日本では主流ですから、就職できずにアルバイトからスタートすると、それ以降、なかなか条件が整わず、将来の生活をイメージできない状況で毎日の生活を送ることにつながりかねません。それをできるだけなくすために能力を見つけて、正規就労に繋げていきたいと動いています。

これが今、私たちの大学で取り組んでいるセンターの動きで、いろいろな人の力を借りながら取り組んでいます。コロナ禍では、大阪の中小企業や、神戸市の社協、セブンイレブン、コープこうべ、イーライリリー社と組んで、学生に必要な物品をいただくなど、様々なサポートを続けています。我々の活動は、ひいては地域社会の維持・発展にも繋がると考えています。

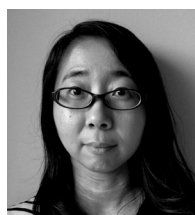
現状は、コロナでオンライン授業が1年間ほぼ続いています。アルバイトが減り、学習の継続が困難な学生がますます増えることが予想されます。こういった学生をつまづきや成長の指標をこれから作っていくことで、他大学でも活用していただける指標を目指すほか、効率的な学習継続の支援や、退学者への就労モデルについても、これから考えていこうと思っています。

弘本 「学生の未来センター」は全国でも先導的な取り組みですね。ある種、大学を拠点としたコミュニティソーシャルワークの新しい形ではないかと感じながらお聞きしていました。また、首藤さん、西垣さんの活動が神戸から生まれていることに、阪神淡路大震災との直接間接の繋がりを思いながら聞いていました。

では、次に中野さんです。中野さんも神戸を拠点に在留外国人の方々の支援に取り組んでおられます。

中野 普段、留学生や技能実習生の支援をしているのですが、今回はコロナでそういった方々がどのような状況になったのか、事例を含めながら説明をさせていただきます。

まず経緯です。実は2019年の12



中野 みゆき

月頃に中国でコロナが広がり、私たちのシェアハウスでも年明け早々に中国からの留学生が来られなくなりました。緊急事態宣言の前でしたが、私たちはもう年明けごろから影響を受け始めていました。

学生の出身は様々ですが、最初は中国の留学生がクラスで誹謗中傷を受けました。例えば、「～のせいで」という文法を授業で教えた後で、みんなに文を作らせると、「中国人のせいでコロナが多くなった」という文章を作る子が出て、中国の子が席を立て、「今、なんていった？」と一触即発になったり、中国の子が「教室で怖くて咳ができない」と訴えることがありました。また、「登下校時に電車で友だちと中国語で話していると、日本の方の視線が怖い」という話も出ました。

その後、徐々に感染が市中に広がると、学生たちが国籍を問わず、情報の弱者になり、トイレットペーパーやマスクなどが次々に売り切れる中で、その状況に気づけない学生が多く、ふと授業中に、「どこのスーパーに行ってもトイレットペーパーがないのですが、先生、どうして？」と話したこともありました。緊急事態宣言で学校に行けず、アルバイトも休みになった留学生は、Wi-Fiにつながる環境を奪われて、情報が入らない生活になりました。

その後、アルバイトの解雇が徐々に始まりました。留学生は元々週28時間までという規定があります。週に3回から4回くらいのアルバイトが2週間に1回に減り、日本の子はシフトに入るけれど、留学生だけ名前がいつまで経っても入らない状況に陥る子が多く、食費を削ったり、(食事を)1日1回にする学生が増えてきました。留学生の中には、結核の保有菌を持っている場合もありますので、今度は結核が出てこないか、など、別の感染症への懸念が教師の中で広がっていきました。

そういう中で、私たちが出会った、本当に最後の最後にまで来てしまったのが、ブータンの留学生の子です。彼は進学が決まっていたけれど、アルバイトが少なくなり、お金がなくなり、学校の卒業が認められず、留学ビザが取り消されてしまった。卒業していないので、短期滞在の観光ビザに切り替えるしかない。そうになると、今度はアルバイトができないという状況になり、所持金が底をついた。最終的に野宿に追い込まれて、うちのシェアハウスでお預かりをしました。

こうしたケースが徐々に始まったので、入管に「短期の滞在ビザではなくて、アルバイトができる特定活動へ

のビザに切り替えてほしい」と何回か依頼しに行きました。今は切り替えられるようになりましたが、当初はアルバイトが大事な留学生在が、アルバイトから切り離される状況になってしまいました。私たちのシェアハウスは兵庫区にあるので、神戸市の国際課、兵庫区役所とも情報を常に交換しました。国際課からは、どんな支援があったらいいか、と相談話があったり、区役所からは、そうした学生が何人くらいいるのかなど、詳しい情報をお互いに交換しました。その後、神戸市から、困っている留学生の生活を助けるための助成金が出ました。入管、国際課、区役所との3つの連携があったから、こうした助成の話につながったのです。

またこの時留學生への支援は有償ボランティアであることがポイントになりました。当初は、入管が特定活動ビザに切り替えられない状況でこの支援が始まったので、留学生の地域清掃へのアルバイト派遣が就労として認定されると、参加できない学生が出てしまう。そこで、神戸市に「必ず有償ボランティアとして活動に参加してもらうことを大前提にしてください」とお願いしました。

兵庫区で、先ほどの勝部さんのお話にもあったように、貸付が始まりました。兵庫区は「人口が減らないのは留学生のおかげだ」といわれるぐらい、留学生で人口が守られているところがあります。社会福祉協議会からも、留學生が貸付の相談や申込みに大勢来ているという話が出てきて、言語的な問題もあり、私たちのNPOのスタッフが週に2回、窓口業務をサポートして、留學生が申込みに来たときは、うちの生活支援事業へと繋げることを今もやっています。

生活支援事業ではまず食べ物を配りました。配るだけで目的ではなくて、ヒアリングをしながら、その後、顔を合わせながら定期的に状況を確認していきます。最初は神戸市の助成事業として始めましたが、今は地域の方、企業からも寄付をいただいています。さらに困っている子には、うちのシェアハウスの空き部屋を無償で提供しています。自然災害ではないですが、やはり今回のコロナというのはある意味、誰にも止められなかった。留學生であればお金はないけれど力はある。そういう子には、次の留學生のために食料品の買い出しを手伝ってもらっています。「手伝ったから持って帰っていいんだよ」と、決して与える、与えられるという関係性だけに終わらない形に気をつけて取り組んでいます。また、お金も家もない、何もない状況になってしまった子に、「地

域の方のために布マスクを作る活動をしてみたらどう？」と提案して、彼が140枚せつせと作って、支援団体や介護施設に寄付をしました。「何もない」という今の自分も社会の一員という意識を持ってもらおうと思って始めた活動です。

今後の取り組みとしては、進学先の入学金や日本語学校の後期の学費など、納付金が増える時期があります。元々週28時間しかアルバイトができない中で進学を諦めてほしくないの、給付型の奨学金が出せないか、今、取り組もうとしているところです。

弘本 制度の隙間でこぼれていく視点、取り残されて置き去りにされる人たちを見つけて掘り起こし、政策にフィードバックされる点、さらに、支援される、するの関係ではない、主体性や人の尊厳を大事にされる点など、大切な指摘をいただきました。

最後は、市民に寄り添う形で、地域の資源を活かしながら公民連携をコーディネートする手法を展開されている筋原区長にお話しいただきます。

筋原 私は今、大阪市港区の区長ですが、その前は大正区の区長でした。大正区は、大阪市24区の中で一番人口が少ない区です。人口減少、人口流出を止めるために、最初はいろいろな集客イベントをやりましたが、やはりそれだけではだめ。日常をおもしろくする必要があると考え、おもしろい人がするおもしろい店や場所を増やそうと、空き家を改修、リノベーションする活動を始めました。

ただ、実際やってみると、空き家のオーナーさんは高齢の方も多くて、相続も気になって貸すのに躊躇する。お店をやりたい若い方は、収支計画の書き方がわからない。銀行からのお金の借り方もわからない。そこで、オーナー、テナント、若い方がワンストップで相談できる専門家チームを作らないといけないと感じた。それが今日、このワークショップの企画者の所属の一つでもある、大正・港エリア空き家活用協議会（WeCompass）というチームです。コーディネーター、法律相談の弁護士、我々役所も入って行政関係の調整、地域との調整もします。DIYのサポーターとしての大学や、金融機関にも入ってもらいました。



筋原 章博

空き家活用のモデルとなった「ヨリドコ大正メイキン」の始まりは築60年の長屋に1人の女性のイラストレーターの方が住みつかれたこと。前の居住者のごみの山が中に残って、あまりにもぼろぼろで「どうしたらいいかわからない」と途方に暮れていることをFacebookで発信された。たまたまそれを見て、大正区で困っている区民から「ヘルプミー」って言われたら区長が出ていかなあかんと思って連絡を取ってみた。そこから、WeCompassに繋いで、結果的にクリエイターの住まいと制作・販売もできるシェアアトリエ兼共同住宅が出来上がりました。こうした動きが重なり、地域の活性化も目に見えておもしろい動きが出てきました。

それから、コロナについてです。コロナ禍で、子どもたちは学校も休校になり、どういう状態なのか心配でした。港区ではNPO法人FAIR ROADと港区の地域の方々が一緒になって、中学校の図書室の中に「はとばカルチャ」という、教室に入れないう生徒たちが誰でも行ける居場所を作っておられました。ここは先生は入ったらいけない。地域の方とNPOの方が来て、雑談、ゲーム、動画など、ひたすら好きなことをやっています。それで気持ちがほぐれて、教室に入れなかった生徒がまた教室に戻ることができるケースも出てきました。また、ここで生徒からもらえる情報が貴重。来るのは中学生ですが、妹、弟が小学生の子もいますし、親御さんの課題も当然ある。「昼間はここにいるけど、夜、どこにいるの?」と聞いたら、区内にそういう子どもたちのケアをしている方がいて、そこに集まっていることがわかった。それを聞いて、NPO、区役所のメンバーでその方を訪問して、なんとか地域の見守りの輪の中に入れてもらう。そういう調整、活動をしているところです。

弘本 5人の方に共通しているのは、困った人がいたらとにかく助けるメンタリティ。もう1つは、課題は深刻でもポジティブに解決する知恵、地域の資源を活用しながら解決策を導き出され、そのことがお一人お一人の力や助けになるだけでなく、関係性を豊かにしてコミュニティの活力になっている。このことは孤立の緩和にも重要なポイントだと改めて思いました。ここから、相互に意見交換ができればと思います。

西垣 今日の話聞いてアイデアをいっぱいいただきました。なかでも首藤さんの話に感銘を受けたのですが、

子どもときの長屋住まいの経験が発想の原点とお聞きしました。また、筋原区長も長屋の活用事例を発表された。けれど、現在、長屋は日本の中でほとんど作られない。特に都市ではマンションが圧倒的に増えています。関係性づくりが難しいマンションで、どのようにそれを乗り越えていけるでしょうか。

首藤 今日、皆さんが直接目の前にある課題にリーチしようとしていない点がいいなと思いました。例えば、行政の中で「孤立をなんとかしなければならぬ。どうしましょう」と企画を打っても、そこに本当に困っている人はなかなか来られない。だから、間接的な場所がいい。長屋は、長屋があることで日常の繋がりが生まれるから。現代的な長屋は減っていきませんが、シェアハウスや、外国人の活動でも、区長のDIYも、やることによって様々な課題にリーチできる。空き家だけを解決するのではなく、その地域にちゃんとハブがあることが重要。そして、地域によってハブの場所は違うと思う。それをちゃんと作っていくことで課題にリーチしやすくなるし、現代的長屋になるんじゃないのかな、と話を聞きながら思いました。

筋原 私も長屋は大好きですが、実際のところ長屋の活用はそう簡単ではない。やはりオーナーさんがどれだけ地域や建物や人に愛を持っているかに尽きる。収益だけを考えるオーナーさんではうまくいかない。やはり愛です。ですから、遠回りですが、地元愛を持ってもらえるように、「このまち、エリアが好きや」をまずは増やしていく。それには、日常をおもしろくすることから始めないといけないと思います。

勝部 私たちも地域に拠点を作るため、空き家の活用や、男性の交流のために、宅地を農業に活用してコモンズにする取り組みをしています。あるオーナーさんの文化住宅で孤独死が起きました。孤独死を防ぐことを考えると、自分が一軒一軒見て歩くわけにいかないから、その中に交流できる場所を作った方がいい。また、外国人労働者、技能実習生がお住まいのところだと、住民間で臭いの問題、食べ物のことなど、文化的なトラブルを防ぐためには、共に集える場所を作って、お互いを理解する方がいいわけです。そんなご相談も入って、一緒に今、DIYで拠点づくりを始めています。

結局、本当のことを知らないからお互いに理解ができず、カテゴライズして見てしまう。お互いを知り合うと、「そんなことで困っているのか」「こんなことをやれば、お互いさま。私もできるよ」、「あなたはこんなことをやって」となる。だから、一方的に支えられる、支えるではなくて、「自分ができることはこれ」「こんなことをお願いしたいな。若いから、あんた、これ、頼みたいわ」みたいな話ができてくると繋がっていく。同じ人たちだけが集まらないことに、いろんな可能性があると考えて、私も地域共生の活動を進めています。そういう意味では、拠点は、新しいものを行政に作ってもらうより、自分たちのまちの中の楽しい場所をどうやって生み出してくかが重要だと思います。

私も質問があります。学生未来センターの取り組みがいいですね。私たちも今、引きこもりの支援とか学校でドロップアウトしている人たちの相談を聞いていて、もっと学校がフォローしてあげられないのかなと思っていました。例えば、そういう方に私たちがアプローチするには、ものすごい労力がある。第一、知らない。まず信頼関係を作るだけで、大変な労力が必要です。けれども、学校の中でちゃんと受け止める人がいて、そこと繋がれば、就職、社会参加、その子が活躍できる場所の提供が進みやすい。ぜひ全国の大学にそういう体制が整うといい。留学生の子たちも、コロナで困っています。学生相談という昔っぽくて違うのですが、本当に自分たちが困ったときに頼りになる場所が学校の中にしっかりあることが重要だと感じました。

西垣 今、高校か大学が最終学歴になることが多いのです。義務教育ではないのだから、そこで、やめていく学生を突き放すことは実に簡単なことです。しかし、その先、どうなるんだろうと思うと、本当に不安要素が今の日本では大きい。やはり繋いでいく仕組みづくりがある。たとえば社会福祉協議会が軸になり、多くの地元の企業さんや周りの地域の方々が学生と接点を持ち、連携していくことは少しの工夫でできると思います。仕組み自体はそれほど難しいものじゃない。それを動かす人がいるのだと感じます。

弘本 中野さんは拠点づくり、行政も含めた関係づくりなど、果敢にチャレンジされてこられました。そこで感じられる壁、どんなサポートがあればもっとブレイクで

きるとお考えでしょうか。

中野 留学生という立場だと、なかなか地域と繋がるところまでうまくいかず、学校かアルバイト先で終わってしまう。やはり地域と繋がりたいと思って、シェアハウスを一番最初に作りました。最初、外国の方が集まるシェアハウスを皆さん怖がり「こんなものができるけど、地域、大丈夫？」と神戸市に通報された。それを神戸市から聞いて、顔の見える形を作らないといけない。子どもでもおじいちゃん、おばあちゃんでも誰でも来てもらえる場所にしないといけないと思いました。そこで、地域の方に貸し教室をしたり、夏祭りやスーパーボールすくいなどのお店当番を留学生にしてもらいました。やはり接点が大切で、地域と留学生を繋ぐ役割に重きを置いています。自分たちで解決するより、いろんな人を巻き込んでやっていかないと、やはり多文化共生という視点は広がっていかない。そう常に考えて動いています。

弘本 首藤さんは、様々な人が集まり支えあう多世代のシェアハウスを運営されていますが、そこで新たに始められるお子さんたちのフリースクールには、どんなふう

に人を集められるのでしょうか。

首藤 どちらかという学校に行けなくなった子がフリースクールに行くイメージがありますが、今の不登校生をよく見ると、自信を持っている子が多い。今の学校ってベストじゃないなと思っている子がほとんどだと思う。彼らに力を貸してあげたい。子どもだけじゃなく、大人も高齢者も、自分がやりたいことをやれる場所があるといい。多世代で集めたいと考える人たちはみんな一緒だと思う。そこをフリースクールという、今、ニーズのある形でやった。神戸市には、2000人以上の不登校児がいるといわれているが、フリースクールは指で数えるほどしかない。だから、どんどん作るべきで、「人、来てください」じゃなくて、「あそこの場所はこういう考え、力があるんだな」を出すようにしています。長田区の地域を盛り上げたいとは思っていますが、それだけやると偏る。こういう暮らし方があってもいいという価値観の選択肢を増やすとエリアが一気に広がる。だから、口コミで広がっていく状況が今はできて、実際にフリースクールとして生徒証を渡してはじめています。コロナ禍で手探りですが。

弘本 スタッフの方も、自ら手を挙げて来られるんですね。やはり価値観、選択肢を示して、そこに行けばできることがある、学べることもある、そういう場の力ですね。

筋原 私は「めざす着地点はぎりぎりアウト」を掲げて公民連携をやっていますが、首藤さんの取り組みは本当に突き抜けている。結構「ぎりぎりアウト」。これだけのユニークなことをされて、苦情はありませんか。

首藤 もちろんクレームもありますが、そういう人は絶対にファンになると思っている。クレームをいう、ということは興味があること。向き合っていくことでファンに変えていく。「ぎりぎりアウト」って大事な言葉だと思っています。僕たちは制度にのせる気がないので、今、目の前でこういうものが必要、喜ぶだろうとまず考え、それに対して、使ってもいい制度はどれかなと考えます。僕たちの業界は制度化をしたがるのですが、これだけの少子高齢化は過去の歴史を振り返ってもない。今ある制度は正解ではないから、そこから逆算して作るのはいくつか。だから、今ある現状に対して一番使ってもいいベターな制度を入れて、もっといいのが出たら変えるというやり方をしています。「ぎりぎりアウト」いいですね。

筋原 公民連携というと、役所は「じゃあ、補助金出しますね」となりがちです。そうではなく、民間の方がエッジの立った新しいことをされる。時に、それを制約なく実現できるための環境をつくる方が大切。そういうステージ作りがこれからの行政の仕事。トップランナーのアイデアについていって、実現のための新しい制度を作る。それが公のこれからの役割だと思います。

首藤 大きな社会福祉法人は、いろんな人の声や顔を気にしないとできない。けれど、僕らの会社は自分らで責任を取れたらいい。僕らが新しい形を作ると、大きい会社でもチャレンジしやすくなる。いい役割分担だと思います。初めはいろいろ反対はされますが。

勝部 私たちも先駆的な活動をやりだすと、そこに補助金が付く。けれど日本のさまざまな制度は、家族がいる前提で介護保険以外はまだまだ。特に子どもの分野なんてほとんどサービスがない。コロナでいろいろご破算に

して考えたときに、どうして高齢者にだけ見守りしていたんだらう。どうして配食を子どものいる家庭にしなかったんだらう、と考え始めました。コロナにいろんなことを制限されたけれど、本当に厳しい人たちは誰なのか。そういう人たちに繋がるためには何をしたらいいのか、考えた半年でした。外国人の人たちとも、まちの中で苦しい思いをしているのに、今まで制度から外れたところにおいて、誰も知らない暮らしになっていた。だから、どうやって一人もとりこぼさないようにするのか、ますますこれから考えたいと思いました。

今日感じたのは、役割とか、支える側に回ることではなく、自分が優位になることではなく、エンパワメントされていくこと。留学生は弱いからお金を渡すではなく、「あなたもやれることをやってくださいね」という循環。役割を果たせることで幸せになる。私たちの取り組みでも、コロナの中で引きこもっていた若者たちがYouTubeに登場したり、食材支援の裏の仕事をやってくれたこともあり、循環させていくことがおもしろい。混ぜていくこと、循環が大事だと思いました。

弘本 皆さんに共通するのは制度に人を合わせるのではなく、人の側に制度、社会、仕組みを合わせていくアプローチ。今まで当然と思っていたアプローチの逆。そうしたアプローチの逆回転にチャレンジされている。我々が疑問に思っていたことに対して、的確に行くべき道に光を当てていただきました。では、最後に京都大学の三浦研さんにまとめのコメントをお願いいたします。

三浦 今日のお話を伺って、これからは、グローバルとローカルのバランスが課題だと感じました。オンライン化はグローバル化の方向に進みがちで、便利ですが、勝者がすべて総取りする社会に進む。一方、今日、皆さんが支え、寄り添っているのは、お金、健康、様々な繋がりを持っていない人たち。その人たちがグローバルな流れからはじき出されると、今までにない不利な状況に置かれてしまう。



三浦 研

昨日の全体シンポでは、大阪ガスの実験集合住宅NEXT21が、別にコロナを前提にして設計していないのにコロナにも対応できている話を伺いました。つまり、

本質的なものが時代の変化に強い。結局、もう一回人と人の多様で豊かな繋がりを、こうしたオンラインを組み合わせてどう作れるのか。首藤さんが言われたみたいに、新しい選択肢として僕らが積極的に取り組むところに新しい社会のコミュニティ形成があるのだろうと思いました。

弘本 実は、NEXT21には大阪の長屋文化を現代的に再生しようというコンセプトが込められています。人と人の関係を作る基盤のあり方にも、思いを馳せて三浦さんのコメントをお聞きしました。今日共有させていただいた、各現場の最前線の情報や論点が、確実に今後に繋がり活かされていく予感を強く抱いています。ご参加の皆さん、本当にありがとうございました。